

大宰府アカデミー・令和編 第7講 令和5年10月18日(水)質問及び回答(Q&A)

「古代大宰府の宗教世界」

講師・回答:森 弘子先生

(大宰府アカデミー・令和編 副学長、福岡県文化財保護審議会会長)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 鎮護国家の時代、日本と新羅は互いに調伏を目的として、呪詛が行われたとのことですが、国交はなかったのでしょうか？また互いの国の情報はどのように入手していたのでしょうか？

A/ 回答

まず、お尋ねの日本・新羅の国交という点です。それが両国の公的使節の往来ということであれば、それは新羅からは遣日使（日本側の史料では新羅使）が、日本からは遣新羅使が任命・派遣されていますので、国交はあったといえるでしょう。こうした往来や、また遣唐使、遣渤海使の派遣などによって情報を入手していたと考えられます。

ただし外交交渉のなかでは、日本と新羅との間にはさまざまな軋轢が生じています。日本は、その際に交わされる新羅からの国書や口頭による報告などに、従来の通例によらず、無礼な点があるとしばしば指摘しており、天平宝字年間（757～765）には、藤原仲麻呂政権による新羅征討計画もあらわれてくるのです（この計画は、仲麻呂の失脚によって実現はしませんでした）。新羅からの公的使節は宝亀10年（779）の来航が、結果的には最後になります。

そうした過程のなかで、講座で紹介した宝亀5年（774）の四王寺山における新羅呪詛に対抗する仏像造立・寺院建立ということがみられるのです。平安時代前期までは朝鮮式山城としての大野城と、四王寺の記録とが並行してあらわれますが、それ以降は四王寺（あるいは四王院）のそれが主となります。こうした点を考えると、講座でも申しましたように、宗教的な場としての四王寺山がもっと注目されるべきだと考えているのです。

Q/香椎宮では、仲哀天皇が亡くなったということから、仲哀天皇の廟という性格があるのでしょうか？

A/ 回答

『筑前国風土記』逸文には、（大宰府の官人などが）筑紫国に赴任すれば、まず香椎宮に参詣するのが例とされており、中央政府にとってもきわめて重要な場所であったことが知られます。同宮の縁起である『香椎宮編年記』には神亀元年（728）の創建と記されますが、確実な初見例は同5年11月に大宰帥大伴旅人・大弐小野老・豊前守宇努男人らが参拝した記事（『万葉集』巻6）なのです。

祭神は仲哀天皇、神功皇后です。ご指摘のように、仲哀天皇が香椎宮で亡くなったという伝承（『日本書紀』仲哀天皇紀、『古事記』仲哀天皇段）があり、古くから香椎宮を仲哀天皇の廟とする説もありましたが、その後のさまざまな研究を承けて、現在、学界においては神功皇后の廟とする説が定説になっています。

もちろん、神功皇后は実在の人物ではありませんが、おそらくは、この地における長い間の半島との緊張関係の記憶、またそのような中から生まれた伝説などから、新羅に対する勝利の女神として創出されたものと考えられます。香椎宮の地は、磐井の乱の後、息子の葛子が献上した粕屋屯倉の地で、磐井が新羅との交流をするための港だったという考え方もあり、そのような重要な場所であったからこそ、ここに中央政府によって新羅に対抗するための香椎宮（香椎廟）が建てられ、そしてそのことには、内政的な意味もあったのではないかと考えています。

※ ご質問ありがとうございました。